

第1回レポート

自校の教師同士の対話を通じて、 教育の「これから」を考える

新学習指導要領の実施まで2年を切った今、自校の教育の「これから」について、教師同士がそれぞれの考えや思いを率直に語り合う場が求められている。そこで、VIEW21編集部は、自校の教師同士で自校の教育の「これから」について考え、語り合うオンライン・ワークショップを企画。その第1回目を9月18日に実施した。

第1回オンライン・ワークショップ の概要

日時 2020年9月18日(金)
15時00分～17時00分
形式 オンライン(ライブ配信)

主な内容

- VIEW21編集部と講師の長野県蘇南高校・小川幸司校長による本誌8月号の特集記事についての解説
- 本誌8月号の特集の末尾に掲載のワークシート(P.32～33)を活用した、校内での対話「自校で育成を目指す資質・能力」「臨時休業を始めとする想定外の事態の中で の気づき」「教育活動の見直し」の3点について、それぞれ自校の教師同士で語り合い、その内容をオンライン上のシートに書き込むことで、参加校がお互いの状況や課題を共有。さらに、講師の小川校長が助言を行った。

本誌8月号の特集に登場した 実践者の講話を基に対話

本誌は、今号より、コロナ禍における教師や生徒の気づきや学びを踏まえて新学習指導要領を捉え直し、教育の「これから」を考えるシリーズ特集を開始した。その起点となった前号の8月号では、育成を目指す「資質・能力」とは何か、それはどういった場面で発揮されたり、育まれたりするかを、高校生や社会人、そして現場の教師たちの気づきや学びを通して改めて捉え直した。予測困難な社会を「生きる力」を育む教育を、どのようにして実現するのかを考える特集であったが、そうした「まだ誰も明確な『答え』を持っていない課題」に学校現場が取り組む際には、すべての教師が立場や職歴を超えてそれぞれの考えや思いを共有する「対話」が必要となる。そこで、自校に対話の文化を醸成するきっかけにしてみようべく、本誌の特集を踏まえて、自校の教師が教育の「これから」について語り合うオンライン・ワークショップを企画した。

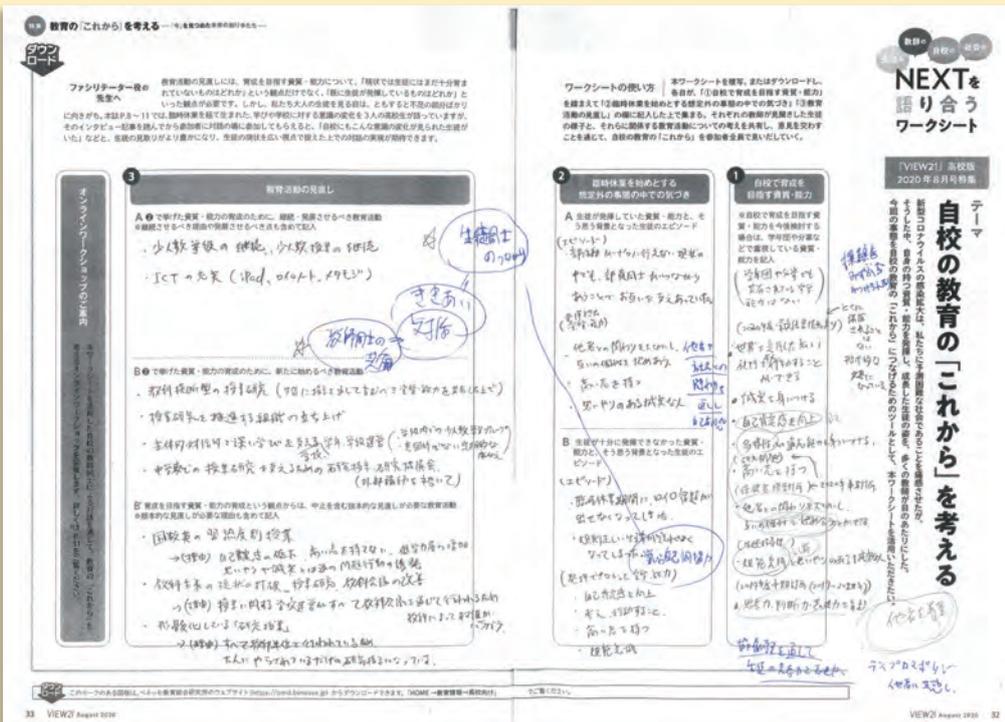
その第1回目が、9月18日に実施された。まず、本誌編集部が8月号



写真1 教師同士の対話を重視して、コロナ禍による想定外の事態に向き合った経験を語る小川校長。定期的な職員会議以外にも、教師を小ブロックに分けて毎日語り合う場を設けるなど、「動的な対話の集団」づくりに挑んだ。

の特集の概要を説明。次に、講師・ファシリテーターを務めた長野県蘇南高校の小川幸司校長が、コロナ禍での気づきを踏まえ、これからの社会で求められる「資質・能力」の視点から、自校の教育活動の再構築を行った取り組み(8月号・特集P.26～29に掲載)を紹介した(写真1)。その後、臨時休業下での生徒の成長についてお互いの気づきを共有し、資質・能力のさらなる育成のための教育活動のあり方について語り合う、自校の教師同士による対話が行

参加した教師のワークシート



本ワークショップに参加した教師のワークシート。「教科や分掌に一任していた事柄の中には、学校や学年団としてもっと対話を重ね、改善を図るべきことがあると、自校の教師と共有できたのが最大の収穫」と感想を語った。

われた。2020年度の本誌の特集の末尾には、その号のテーマについて自校の教師同士で語り合い、実践につなげるためのワークシートが掲

載されているが、今回のオンラインワークシヨップでは、そのワークシートを使った対話が展開された。対話の具体的な流れは次の通り

だ。まず、参加者各自が事前にワークシートに記入した、①「自校で育成を目指す資質・能力（自校で育成を目指す資質・能力を今後検討している場合は、学年団や分掌などで重視している資質・能力）」と、②「臨時休業を始めとする想定外の事態の中で、生徒が発揮していた資質・能力と、生徒が十分に発揮できなかった資質・能力」、それぞれ思う背景となった生徒のエピソードについて、自校の教師同士で共有した上で、特に印象に残ったエピソードをオンライン上のシートに書き込み、それを参加校間で共有した。小川校長は、各校に見られる共通点や特徴に言及し、課題については助言を行った。

そして、③「資質・能力のさらなる育成のために、継続・発展させるべき教育活動、新たに始めるべき教育活動、中止を含む抜本的な見直しが必要な教育活動」について、①・②と同様の流れで対話を行った。そうして、各教師が見聞きした生徒の様子と、それらに関する教育活動についての考えを共有し、意見を交わすことを通じて、自校の教育の「これから」を見いだしていった。

写真2 星稜中学校・高校からは、3人の教師が参加。同校は、中高一貫校としてのランドデザインの策定に向けて動き始めている。



対話を通じて、自校の「これから」が見えてきた

オンライン・ワークショップの参加校の中から、2校の様子を紹介する。

石川県・私立星稜中学校・高校は、主体的に学ぶ力や思考力、判断力などを生徒が身につけていけるように、様々な教育プログラムを設計している。そうした中で、校内の教育

写真3 若狭高校からは4人の教師が参加。同校は、「責任を持って、主体的に社会を変えていこうとする意志」を生徒に育むため、教科の授業や探究学習の改善などに取り組んでいる。



活動を統合する大きな目標の設定の必要性を感じ、教師間の目線合わせの方法を学ぶ機会として、今回のオンライン・ワークショップに参加した(P.29写真2)。同校の生徒の多くが、臨時休業中でもICTを活用して教師に積極的に質問や相談をしてきたことから、向上心を持って学びに向かう力が身につけていることを、教師たちは実感したという。そ

VIEW21 編集部 ファシリテーターより

自校の教師同士での対話を楽しめるよう配慮

VIEW21編集部では、2019年3月に開催した「カリキュラム・マネジメント」に関するワークショップ(*)などを通じて、ファシリテーションの経験とノウハウを積み重ねてきました。オンライン・ワークショップの実施は初めてでしたが、当日は、「自分(自校)の問題意識や考えは自分(自校)だけが持っていたわけではなかった」「自分(自校)にはない問題意識や考えだ」といった気づきを参加者に持っていただけのような心がけ、そして何より、「対話を楽しんでもらいたい」という思いで、丁寧に会を進行しました。画面を通じてうかがい知ることができた、熱を帯びた対話の様子や、事後アンケートの声からも、参加者が対話を楽しまれた様子が伝わってきました。積極的に参加をいただいたことに、改めて感謝申し上げます。

うした生徒の成長を、今回の対話を通して確認したことで、カリキュラム・デザインに生徒も参画させ、到達目標を生徒自身が設定して、教師とともにアクセスメントを行う仕組みづくりを模索していきたいと、今後の教育活動のあり方を大胆に展望した。同校の教師の1人は、「今回の対話によって、個人で考えていたことに一本筋が通り、方針ができたように感じた」と、手応えを語った。

福井県立若狭^{わかさ}高校は、全国の高校教師がコロナ禍でどのような課題に直面し、コロナ禍を教育的転機としてどのように生かしているのかを知ること、自校の現状を俯瞰的に捉え直したいと思い、参加(写真3)。

同校の教師たちは、蘇南高校の小川校長の、従来の学校観にとらわれな

参加者の声(事後アンケートより)

同じ高校の生徒に対して、それぞれの教科でどのような授業を行っているのか、その一端を共有できました。今回の対話で、生徒観を深めたり、具体的な授業改善につながったりするきっかけになりそうです。こうした対話の機会を校内でさらに設けることで、例えば、生徒が苦手としている数学の内容を、理科の授業で扱う際に留意して指導するなど、教科間連携が進むと思います。

今回のオンライン・ワークショップに参加した教師から、「本校はこうした対話の場が少ない。もっと必要だ」という意見が出ました。これを機会に、対話の場をぜひ設けていこうと思いました。

同僚と対話する中で、校内における情報や目標の共有がまだ十分ではないということが明らかになりました。そして、自分が常々感じている課題意識は決して個人的なものではなく、学校共通の課題であるということ、改めて確認することができました。

教師によって表現は異なっていますが、「原点となる考え」が共通していることが見えてきました。迷った時には、今回のワークショップで見た原点に戻ればよいのだと思いました。

い取り組みを聞く中で、福井県立中学校・高校計28校の全生徒に貸与されるタブレット端末の活用に注目。「ICT環境が整備され、教育手段が増えた時、生徒が主体的に学ぶ機会をどのように設計していくか」「I

CTを十分に活用しながらも、学校という場でしかできない教育活動を模索する重要性」を語り合った。同校の教師の1人は、「社会が激変する中で、臨機応変に対応できる力が今まで以上に私たちに求められる」と、教師としての課題を語った。

本誌では、今後も授業のあり方や学習評価、特別活動をテーマとした教育の「これから」を考える特集と、自校の教師同士の対話を通じて、各特集のテーマに対する考えを深めるオンライン・ワークショップを展開していく。各校の「これから」の学校づくりに役立てていただきたい。

* カリキュラム・マネジメントに関するワークショップの詳細は、本誌2019年6月号の特集(P.2~23)に掲載しています。